

風車を回そう



キャセイ産業株式会社
ジェイ・コスモ株式会社
代表取締役社長
大島修治 ● おおしましゅうじ

小学生のころ、いじめられてしょんぼりしていたとき、父は風車の話をしてくれた。「風車はどっちを向いたら回る?」。小学生でも分かる質問だ。「風が吹いてくる方向だよ」。父はニッコリ笑って続けた。「それは冷たい冷たい北風かもしれない、もしかすると台風みたいな強風かもしれない、それでも風車は元氣よく回るよね」。

逆境にめげず、かえってそれをバネにして元気に生きるのだ、と論じてくれたのだろう。

平成八年、会社を押し入った暴漢にガソリンを掛けられ火をつけられた。この事件により会社は倒産寸前に追い込まれる。私はICUで生死をさまよった。全身の六割を火傷、五度の危篤。痛みは尋常のものではない。病院に運び込まれたときには医者から死の宣告を受けた。痛みには耐えられ

ず何とか楽になれないかと考えた。看護師の隙を見て紐で首を括ろうとしたこともある。しかし、焼けただれ指が落ちた手ではそれも適わなかった。死ぬこともできないのか。絶望の真只中にいた。

ICUは自分の生死だけでなく、他人の生死も間近にある最前線だった。私の横では運動会で倒れて運ばれてきた少年に家族が必死に呼びかけていた。その声が、数日後にはいつの間にか聞こえなくなる。付き添いの妻から、少年が亡くなったことを知らされた。そのとき、私は朦朧とする意識の中で、妻に「僕が替わりに死んであげたらよかったね」と話しかけていた。火傷の痛みから救われたい、その思いが死を望む言葉になったのだ。寝ずに看病を続けていた妻が私を叱りつけた。

「何を言っているのですか!」

優しく看病を続けていた妻から初めて聞く怒鳴り声だった。妻の叱声で私の中に何かが生まれた。

家族のためにも私には生きる責任がある。

数日後に医師から壊疽がひどい右手の切断が告げられた。院内感染症の危険があると言う。面会謝絶から三カ月目にやっと見舞いを許された母は、どんな姿になっても私を一生守ると話していた。

二人の息子は自分たちの皮膚を父の右手を救うために提供してくれた。人は一人などで生きていない。その思いは、やがて「私は生かされている」という確信に変わった。これは天から与えられた試練だ。このことを通して、私は生きなければならぬのではないか。死にたいという思いと、暴漢に対する憎しみしかなかった私に変化が現れた。

そんなとき、父の風車の話が思い出された。逆境の中で風車は勢いよく回るはずだ。今、まさに死線をさまよう程の強い風が吹いているのではないか。回想する父の姿は優しかった。

十数回の移植手術を経て、障害をもつ経営者として現場復帰。私は事件発生の日を命日であり、

誕生日だと思い定めた。

事件発生前、私は全てのことを一人でやり遂げた、と考えていた。傲慢で情けのない人だった。しかし、今は違う。生かされていることに感謝して毎日を有り難く生きようと考えている。湯治で通った温泉にヒントを得て、車椅子のまま入浴できるバリアフリー温泉を開業準備中。しかし、千メートル掘削しても温度が三十度足らず、加温が必要になる。石油ボイラーではCO₂が排出される。熱慮の上、環境に優しい炭素繊維を活用したボイラーと床暖房の開発に成功し特許も取得できた。

ベンチャー事業の立ち上げ、健康と自然環境にやさしい商品開発、こうしたことは私が大火傷に遭遇しなかつたらできなかったことばかりだ。

また、火傷の体験を請われて講演も増えたが、そのことで多くの人と巡りあうことができている。

これからも困難はあるかも知れない。しかし、どんな風でも真正面から受けて風車を回し続けた。ただし、生かされていることへの感謝は決して忘れずに……。